

神輿を迎える家

黒田 一 充

神社の祭りでは、神輿が出る場所は多い。渡御やお渡り、神幸と称して行列を組み、氏子の区域を廻っていく。祭神が旅をすることを考えられているため、神輿が立ち寄る場所は御旅所とよばれる。御旅所は、村や町の広場のほか、旧社地や海浜、河原などにあり、普段は空き地だが、祭りの際に仮設の建物を設けたり、それが常設の建物になったところもある。

神輿が来ると氏子の人びとが参拝するため、一般に御旅所は、公共の場所に設けている。ところが、祭りの当番（頭屋）をつとめる個人の家で神輿を迎えるところがある。

香川県多度津町の葛原正八幡宮の氏子区域は下所・八幡・北条・大木の4地区で輪番に頭屋（統家頭）を廻している。

10月第三日曜日の秋祭に先だって、9月最終日曜に宮司が来て、座敷の床の間に祭壇を設け、御幣をまつって祭神の分霊を迎える。

祭りの2日前の午後には、神社から神輿が頭屋宅へ運ばれ、広庭に安置される。渡御行列の道具類や衣裳も運ばれ、神輿の近くに並べる。翌日午後にも宮司が来て神輿を祓い、床の間の祭壇で祝詞をあげる。その夜、神社で宵宮の神事があり、獅子舞が奉納される。

当日は、朝から役をつとめる男性たちが頭屋宅に集まり、祭壇に神饌を供える。渡御行列の役は4つの地区で分担するため、各担当者が道

具を受け取りに来て、昔からのしきたりでお礼の菓子パンを受け取って帰る。

準備が整うと、神輿は軽トラックに載せ、祭壇の御幣も神社へ運ぶ。石鳥居の前で台車に載せかえ、境内の石舞台と拝殿の間に安置する。

正午から神事が始まり、宮司が神輿に御神体を遷す。その前で、氏子の4つの獅子組が2番ずつ獅子舞を奉納し、大木地区にある御旅所の荒神社へ出発する。行列は昭和前期に描かれた「御神事行列図」の順番を踏襲しているが、役の数は一少なくなっている。途中で獅子舞を奉納しながら約2時間かかって御旅所へ着き、神事の後に本社へ帰る。

神輿を頭屋宅で用意して神社に運び、そこから神幸が始まるようにも見えるが、頭屋宅でまつっていた御幣が神輿の前に進んでいることに注意したい。

葛原地区の南西にある善通寺市中村の木熊野神社では、10月第一日曜日の秋祭に統祖とよばれる5つの組から輪番に頭屋（統本）を出す。

9月下旬、統本宅の広庭に御神舎を建てる。高さ約2メートルの祠で、今は毎年同じ材を使って組み立てる。完成すると宮司が内部に御幣を安置し、この日から毎日まつられる。

2日前の午前中に、神輿を神社から運んで御神舎の横に安置し、午後には潮川神事が行われる。社前の湧き水（宮川）で頭屋たちが沐浴し、御由留輪とよぶ桶に白米を入れて洗い、もう別の桶にも神幸時に道を浄めるための水を汲む。2つの桶は、御神舎の中に納める。



統家頭宅の座敷の祭壇



葛原正八幡宮 統家頭宅の神輿 (2015年)



木熊野神社 統本宅の御神舎と神輿（2013年）

以前は桶を洗うだけで、組中から集めた玄米を翌日桶に入れて一晩まつっていたという。

氏子の獅子組があり、祭りの前に組の各家を廻る。宵宮の日には統本宅へもやってきて、御神舎と神輿に獅子舞を奉納する。

当日は神輿と御由留輪の一行が別々に出発し、御旅所の薬師堂（もとは若宮神社）で合流する。ここではじめて御由留輪を神輿に載せ、神社まで渡御して神前に白米を供える。

しかし以前は、御神舎の御幣から御由留輪に入れた玄米に神霊を遷し、それを統本が掲げて神輿の後ろを進み、御旅所に着いてから神輿内に納めていた。この玄米は前年に収穫したものとのことなので、1年間頭屋宅でまつられていた可能性もある。

さらに、幕末の記録には御神舎は座敷内に安置したとあることから、葛原正八幡宮と同じように頭屋宅でまつっていた御幣を神輿とともに神社へ戻すという祭りの構造を持っていることがわかる。



御神舎内部の御由留輪

神輿が屋外ではなく、座敷の中に安置する例が、三重県名張市滝之原の国津神社の11月第二日曜日に行われる秋祭に伝わっている。同社の氏子区域は上出・仲（中）出・下出の3つの地区（小場）で、

さらに細かい15の組が輪番で祭りの当番（頭屋組）をつとめ、その中から頭屋の家が選ばれる。

前日午前中に頭屋宅で餅つきと神饌の準備をする。日没後に神職が来て湯立をした後、行列を組んで神社へ向かう。

宵宮の神事は20時ごろから始まり、途中から拝殿前で3つの小場の獅子神楽が同時に演じられる。奉納後、22時ごろ御神体を遷した神輿が、頭屋宅に運ばれ、座敷の中にまつって神饌を供える。

調査時は頭屋宅ではなく仲出集会所を使っていたが、23時をまわって神事が終わると甘酒が振る舞われ、宵宮の儀礼は終わる。その後、頭屋は一晩中灯明を灯して神輿を守る。

翌朝10時すぎに部屋の障子が開けられ、神輿が庭に引き出される。この日は頭屋組が属する小場の獅子舞を奉納し、神輿が出発する。獅子舞や子供神輿が続き、頭屋は引き継ぎ文書の入った黒箱（玉手箱）を持って従う。調査時は集会所から最初に頭屋宅へ向かい、そこから改めて出発していた。



滝之原国津神社 座敷の神輿と黒箱（2019年）

神輿渡御は一番奥の上出に向かい、下出の神社まで帰って来る。御神体を本社に戻し、神事の途中には拝殿前では獅子神楽が奉納される。神事の終わると、社務所で氏子の戸主たちが集まった祝座が開かれ、籤で選ばれた翌年の頭屋が披露されて、黒箱の引き継ぎが行われる。

名張市内の神社でも、頭屋宅の座敷に祭壇を設けて御幣をまつり、祭りの当日に行列を組んで神社に戻す事例がある。その祭神がやって来る様子を、神輿の渡御という目に見える形で表しているのが、国津神社の祭りである。

関西大学文学部教授